KAIKO TAKESHI MEMORIAL SOCIETY

開高健記念会通信 06

「広告人・開高健」を藤森益弘理事が紹介

茅ヶ崎市開高健記念館で開催中の企画展「広告人・開高健の三つの顔」に合わせた記念講演が6月1日、記念館に隣接する「茅ヶ崎ゆかりの人物館」で行われ、定員いっぱいとなる約40人のファンが詰めかけました。講師は、広告会社サン・アドで開高健が出演するCMの制作に携わった藤森益弘・開高健記念会理事。開高が残したPR誌や新聞広告コピー、CM映像を示しながら、「PR誌編集発行人」「コピーライター」「CMタレント」という三つの側面から、広告人・開高を紹介しました。

企画展で展示されているPR誌「発展」のバックナンバー

講演する藤森理事

開高は1954年、寿屋（現・サントリー）に入社。宣伝部で酒販店向けPR誌「発展」の編集担当となり、カメラマンと日本各地を駆け回りました。ついで、もっと幅広い文化を取り上げるPR誌「洋酒天国」の編集を任され、最盛期には20万部を発行する人気雑誌に育てました。寿屋は戦前から広告に力を入れてきた会社ですが、藤森理事は「開高が入ったことで宣伝部の第二次黄金時代となった」と指摘しました。

広告の文章を書く職業はかつて「文案家」などと呼ばれましたが、今は「コピーライター」が一般的。開高の活躍が一役買ったといい、藤森理事は「コピーライターという言葉を定着させた一番の人」と足跡の大きさを評価しました。

開高は生涯に20本のサントリーウイスキーのCMに出演。藤森理事はサン・アドの担当者として撮影現場に何度も同行しました。「開高さんは『俺は役者じゃないからな』と言いながらも、表情を何度もテスト。最後にやっと『先生、いいじゃないですか』と言われ、ニタッと笑って満足げな顔をしたという逸話もあった」と振り返りました。

企画展「広告人・開高健の三つの顔」は9月29日まで。茅ヶ崎市開高健記念館（神奈川県茅ヶ崎市東海岸南6-6-64、電話・ファクス0467-87-0567）の開館は金土日と祝日の午前10時～午後5時（最終入場は午後4時半）。入館料200円。茅ヶ崎ゆかりの人物館との2館共通券は300円。

開高が愛した釣り具
つり人社がムックに

開高健と、開高が愛したスウェーデンの釣り具「ABU Ambassadeur」を特集したムック『Old Tackle Anglers』（オールドタックルアングラーズ）＝写真＝が5月に出版されました。編集に当たった㈱つり人社・月刊『つり人』編集部書籍担当の小野弘さん（58）に、ムックに込めた思いを寄稿してもらいました。

◇

月刊『つり人』は焼け野原の痕跡も痛々しい敗戦翌年（１９４６年）、佐藤垢石によって創刊され、以来弊社は「釣らう、無心の姿で。」をスローガンに、釣り愛好者とともに釣り専門出版社としての道を歩んできました。

『Old Tackle Anglers』は２０２１年の弊社ムック『ABU for LIFE』のコンセプトを受け継ぎ、発展させたものです。『ABU for LIFE』の表紙は、琵琶湖に胸まで浸かってブラックバス釣りを楽しむ開高さん（撮ったのは『オーパ！』で撮影を担当された高橋舜さん）。読者に大好評でした。

釣り人、とくに昭和30～40年代生まれの、ルアーフィッシングあるいはフライフィッシングの多くのファンにとって、開高健は人生観を変えてしまうほど大きな影響を与えた作家であり釣り人です。10代の頃に『フィッシュ・オン』や『オーパ！』等の紀行作品を読んで心の眼を大きくひらかされ、今にいたるまでその思いをもちつづけている私もそのひとりです。

そんな私たちですから、久しぶりに釣り雑誌に登場した開高さんに目が釘付けになったのは言うまでもありません。しかも私は版元の編集者です。「この続きが読みたい…というか今度は自分でつくりたい」という気持ちが芽生えてしまいました。

記念会の実行委員でもある集英社の平あすかさんから「開高さんの（未発表らしい）直筆原稿があるらしい」と教えていただいたのは、そんなときのことです。思わず耳を疑いました。そして、（釣り雑誌の）編集者として、また一読者として、生涯に一度あるかないかの機会をぜったいに逃したくない、かたちにしたい、そんな思いで『Old Tackle Anglers』をつくりました。表紙はもちろん高橋さん撮影の開高さんです。

ムックには、記念館に収蔵された釣り具や、そのむかし釣り場で偶然開高さんと出会った方たちの思い出も掲載しています。ムックの製作作業が始まると、開高さんに吸い寄せられるかのように印象的なお話が集まってきました。それは私にとっても本当に不思議な体験でした。そして、その内容は、どれも開高さんを照らす第一級品の資料といえます。とくに『フィッシュ・オン』最終章、日本の銀山湖で開高さんが村杉小屋に長期逗留していた時期に出会われた方は、なんと、あの「縮んだイワナ」のほぼ一部始終を8㎜フィルムで撮影していました。そのフィルムは、6月29日に弊社で開催されるムック刊行記念イベントで上映されます（詳細は月刊つり人ブログ＝tsuribito.co.jp）。

私はいま58歳です。開高さんがお亡くなりになった歳にこのムックの編集作業に携われたこと、ご協力くださった方々に心から感謝申し上げるとともに、この春お亡くなりになられた菊池治男さん、醍醐麻沙夫さん、天国でお二人を迎えられたであろう開高健さん、高橋舜さんに、それから6年前に亡くなった私の上司・若杉隆に、本ムックを捧げます。

おの・ひろし
1965年生まれ。
89年、つり人社正社員に。元『Fly Fisher』編集長。

ちくま文庫版「新しい天体」担当編集者に聞きました

開高健の小説『新しい天体』のちくま文庫版が5月11日に発売されました。１９７４年に出た作品を今なぜ新装版で刊行したのか。担当した筑摩書房の編集者、砂金（いさご）由美さんに聞きました。

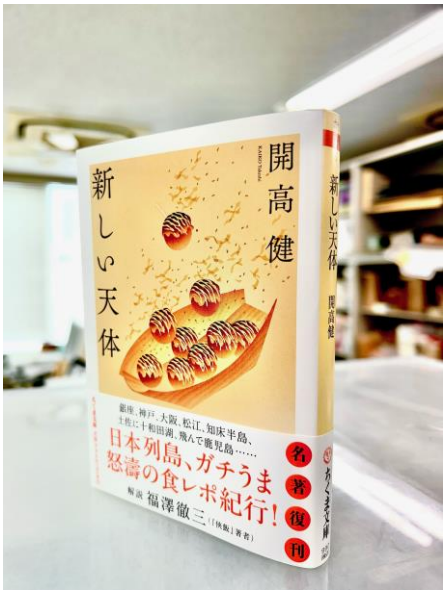
◇

面白いエッセイはないかと常に考えてはいるんですけど、去年たまたま自分の中で「食ブーム」が来ていて、「いい食エッセイ」とか検索していたら、やっぱり開高先生の名前が出てきて「なるほどね」と思って。それで実際に読んでみたら、もうすごく文体がハンサムだ、かっこいいなと思ったんです。本当に日本語がうまくて素晴らしいっていう衝撃がありました。

ちくま文庫はエッセイや評論系が多いレーベル。『新しい天体』は小説ですけれども、開高先生が自分で取材をどんどんされたっていう意味でも、限りなく「食レポ」に近いというか、「食レポ」的な面白みがあるというのを社内の会議では熱弁して。読んでるだけで何だかおいしいし、酒も飲みたくなる本なんです。帯にも「怒濤の食レポ紀行」「ガチうま」って書かせてもらいました。

登場する店には閉店したものもあります。確かに書かれた当時ならグルメガイド的な読み方もできたとは思うんですけれども、やっぱり作家の力というか、店は別に今あってもなくてもいいというか、本の中で楽しんでもらえれば十分おなかがすくし十分おいしい気持ちになる。

私自身は平成生まれなので昭和の東京や全国各地の風俗的なものは直接にはまったく知りません。でも何だかどんどん読める。何も気にせず予備知識なしで行けるから50年経っても復刊できるんです。会って食べて会って食べて。それだけで面白いってものすごい語りの力。その語り自体を新しい読者にも届けることができたらなと思います。



＜新しい天体＞　昭和のある日、しがない役人の男が官庁の予算消化のため全国津々浦々の名物を食いまくる任務を与えられて…。解説はグルメ小説「侠飯」シリーズの作家、福澤徹三氏。税込み990円

「伊佐山コレクション」②

開高の短編「貝塚をつくる」にスウェーデンの釣り具メーカー、アブ社が発行する雑誌「タイト・ラインズ」の１９７１年号＝写真＝が登場します。開高の釣り姿が掲載されたものです。読んだときはインターネットもなく入手は困難でした。数年後ネット上で発見。数千円だったと思います。２０１０年に神奈川近代文学館の企画展「生誕80年『開高健の世界』展」で展示されました。

オリムピック釣具の英語版カタログには「フィッシュ・オン」の英訳が掲載された号があるとか。いつか入手したいです。（開高健記念会実行委員・伊佐山秀人）

〈お知らせ〉

◆「ｋｏｔｏｂａ」が特集

集英社の季刊誌「ｋｏｔｏｂａ」２０２４年春号が「エッセイを読む愉しみ」をテーマに特集を組み、表紙には若き日の開高健が所属した同人誌「えんぴつ」の合評会記の手書き原稿を大きくあしらいました。「開高健の原点」と題した10ページの記事では、「エッセイと言えば作家、開高健」と位置づけたうえで、未完の長編「花終る闇」の原稿を「エッセイとしても読める小説」とキャプションをつけて紹介しています。

◆茅ヶ崎の「すし善」閉店

記念会通信５号でもお伝えしたとおり、開高健が通った茅ヶ崎市の「すし善」が惜しまれながらも３月末で閉店しました。読売新聞神奈川版も記事を掲載。記事によると店主の冨田勝人さん（61）は「ファンに申し訳ない気持ち」としつつも、「開高さんは『人生なんてそんなもんだろう』って言うんでしょうね」と話したそうです。

◆「折々」１００回突破

記念会の公式フェイスブック上で開高健の名文を紹介するミニコラム「折々の開高健」が、３月末で連載１００回を突破しました。これまでの連載は公式ホームページにも掲載しています。「開高健について」→「折々の開高健」へとお進みください。

○理事会より

今期の開高健記念会理事会は、３月19日、４月16日、５月21日に開催されました。３月理事会では令和６年度の事業計画・収支予算を決議。後日、各評議員に文書で報告し、承認を得ました。４月理事会では、今後の活動の企画検討の過程において、実行委員からもより積極的に意見やアイデアを募り事業活動へ反映していこうとの方向性が打ち出されました。これを受けて５月理事会は実行委員参加の拡大理事会として開催。12月９日の記念行事や茅ヶ崎市開高健記念館の企画展等、今後の活動について様々な案が議論、検討されました。

▽次期企画展（10月～　於・茅ヶ崎市開高健記念館）は「書く人・開高健」（仮）。自筆原稿を中心に「文字は人を表す」という観点から開高らしさを探る展示です。ご期待ください。

▽昨年は茅ヶ崎市開高健記念館開館20周年を記念して12月９日の「開高忌」記念行事は茅ヶ崎で行いましたが、今年は例年どおり「開高健とボジョレー・ヌーヴォーの会」として、東京・プレスセンタービルの「アラスカ」（東京都千代田区内幸町２-２-１）にて開催する予定です。詳細は今秋、改めてご案内申し上げます。

▽開高健記念文庫（東京都杉並区井草４-８-14）では、開高の著作・関係書籍・初出誌・関連掲載誌ならびに開高の蔵書約４０００冊と視聴覚資料を揃えています。閲覧は事前申込み制で、令和５年度の来館者は33組42名でした。記念文庫ではさらなる資料の充実を図るべく収集活動を続けています。直筆原稿や書簡等、ご寄贈いただける資料がございましたらぜひ事務局までお知らせください。

▽本年３月16日、菊池治男前理事が逝去されました。謹んでご冥福をお祈りいたします。

（会報担当　鶴田寛之）

〈編集後記〉今回は開高関連の本を作った２人の編集者にお会いしました。２人とも開高のことを話し出すと止まりません。プロを夢中にさせる開高のすごさを改めて実感しました。（中）

「開高健記念会通信」第６号
（2024年６月20日発行）
■発行者　開高健記念会
■編集部　鶴田寛之、中谷和義、星久美子
■発行所　〒167-0021 東京都杉並区井草 4-8-14
公益財団法人開高健記念会事務局
■ホームページ　https://www.kaiko.jp/
■フェイスブック facebook.com/kaikotakeshi/